

# 九州【熊本・鹿児島】にアイヌ民族の痕跡 を求め取材・調査行を実施

2022年8月26日～29日



アイヌが日本列島の先住民族であるという視点から、太陽神オキクルミカムイに淵源するアイヌ文化を代表するイナウ(削りかけ・削り花)と縄文時代の遺物の中にアイヌ文様の痕跡を求めてスタッフ8名が取材・調査を実施した。

さらに、『火の国由来伝承』の起源とも考えられる“シラヌイ(不知火)”の出現が、ここ10年ほど途絶えているとの情報を得、それを確認すべく一昨年(2021年)に引き続き調査となった。

取材調査に初参加のスタッフにはチプサン古墳に描かれた太陽円盤が示唆するように、ここ九州・熊本(火の国)に開花した宇宙文化のフィールドに接し、何かを感じ取ることも重要な目的の一つであった。

8/26

10:35 新千歳空港(10:35発)→福岡空港(13:10着) SKYMARK SKY772便にてスタッフ8名が福岡空港へと出発。

13:10 福岡空港到着

福岡空港からはレンタカー2台に乗車し、九州縦貫自動車道(九州自動車道)の「大宰府IC」より上がり熊本方向を目指して南下する。

昼食をはさみ、およそ100kmを走破して「益城熊本空港IC」で下りる。

最初の目的地である熊本県益城町の「鬼の窟古墳」へと向かう。

15:45 途中、同古墳を擁する天皇への恭順を拒否して戦った「ウチサル・クビサル」の居城が置かれた朝来山を撮影。

事前調査によると「鬼の窟古墳」は朝来山の





原住民の長2名の拠点“朝来山”  
(熊本県上益城郡御船町)

中腹であるという。

かなり狭い山道を車で登る。

山道の右側はガードレールもない崖、運転に細心の注意を払う。

目印の古墳の看板が見つからず探し回ること数十分、倒れていた看板を発見し16:10「鬼の窟古墳」にたどり着く。

古墳は表土を失い一部崩れた形跡が窺え、不安定に積み上げられているようにも観察されたが、各々の巨石は1tを超えているのだろうか？

とても当時の技術力で完成させたとは信じがたいほどであった。

立て看板には朝来山の土蜘蛛に関して以下のごとく明記されていた。

『鬼ノ窟古墳・・・六世紀後半頃、一帯を治めていた豪族の墳墓とされ、この巨石古墳を作るのに多くの人力が必要であったことが予想され、朝来山にいた二人の土蜘蛛、その徒衆180余りとの関係もあるのではないかと。』

古墳の正面前方にはアイヌのチャシの空壕を想起させる溝が認められた。

アイヌの空壕は敵からの侵入に備えた設備で、もし空壕であるならヤマトとの戦闘に供えて造られた可能性が高い。

それにしても土蜘蛛とはあまりにも妖怪じみた表現であり、ヤマトが原住民を人間扱いし



ドルメン状“鬼の窟古墳” (同福原)

ていないことの現れである。

16:55 朝来山を下山して、シラヌイ観測場所のほぼ真下に位置した今夜の宿泊地である宇城市不知火町の「松海苑」へと向かう。

来た道に戻り、「益城熊本空港IC」から九州自動車道をさらに南下して「松橋IC」で下りてR266を西進する。

18:35 旅館へ入館する前に撮影場所である「天の平農村公園」駐車場をチェックする。

昨年同様、松海苑の女将の好意で裏山の撮影場所前面の草木はきれいに刈り取られており、不知火海の東から南西にかけて一望できるよう整備されていた。

当日は永尾剣神社にて八朔祭りが行われ、松合新港沖では午後8時から約2,000発の海上花火が打ち上がる予定であったが、新型コロナウイルスの影響で昨年同様祭りは延期とのこと。

「花火が上がるとよかったのに残念ですね」と女将よりお声がけをいただいたが、どちらにしてもさほど気になることではなかった。



21:30 「天の平農村公園」の駐車場でシラヌイ撮影の準備にとりかかる。

星空の下、デジタルカメラ7台とビデオカメラ1台がシラヌイの出現に備える。

大人数での深夜撮影は暫くぶりである。

約20年前、Aerospaceの創立者である立花氏と行ったシラヌイ撮影会やハヨピラでの夜間撮影会が懐かしく思い起こされた。

昨年のシラヌイ観測では、開始早々に東側の干拓地に幾つかの光源が出現したが、後日それが焚火や車のライトなどの人為的なものと判明した。

今回はそのようなものも見当たらず、メンバー皆であらゆる方向を注視するもそれとおぼしきものは見つからず時間だけが経過した。

8/27

2:00 気づくと海面に光が出現していた。

興奮気味に光の方向へカメラを向けて撮影するが、望遠レンズ越しにその光をチェックをしたところ、それは早朝に出漁した船の灯火であることが判明した。

3:00 残念ながらシラヌイの気配を感じることはできず観測を中止し、宿舎へと引上げた。

9:00 松海苑を出発、R266を西進して最初の目的地である「天草市立本渡歴史民俗資料館」へと向かう。

天候は快晴、左右に海と天草の島々、そしてフェニックスやヤシという南国特有の植物を眺めながら約1時間超を移動する。

10:35 天草市立本渡歴史民俗資料館へ到着。同資料館の本田康二氏のご厚意により、事前に多くのイナウ関連の資料を提供していただいた。

受付で名前を告げると生憎と本多氏は不在であったが、地元では「イワイマショウギ・ハラメボウ・ナレナレボウ」と呼称されていた5



天草市立本渡歴史資料館



図1 ナレナレ木(5点)  
(天草市立本渡歴史民俗資料館所蔵)

本の削りかけ・削り花が別室の机の上に用意されていた。

2名が代表して撮影、取材を行う。

同資料館には天草の民具をはじめ歴史・考古資料として大矢遺跡及び妻の鼻墳墓群等の出土物、文人画等の郷土美術工芸、農具、漁具、養蚕、山樵等の資料が展示されていた。

館内での撮影は禁止であったが、事前に取材アポをとっていたおかげで好意的に対応して下さった。

11:00 謝辞を述べ同資料館を辞した。

景色を楽しむ余裕もなく車は来た道に戻り一路「松合郷土資料館」へと向かう。





松合郷土資料館（旧鈴木家）  
宇城市不知火町松合



館内を取材するスタッフ

12：30 2階建ての白色を基調とした古民家風の「松合郷土資料館」へ到着。

松合ゆかりの先人たちの遺品や資料を展示している。

2階には「シラヌイ」の専門コーナーが設けられ、多くの文献資料や昭和30年代のシラヌイに関する新聞記事など関係資料が展示されていた。

館内の男性スタッフに「遙かな古代から定期的(日時)に出現しているシラヌイは気象現象(蜃気楼説)で片付けられるのですか」と質問したところ「本当は気象現象には疑問をもっている」との返答であった。

郷土資料館のスタッフという立場上、来館者には専門家の「シラヌイ蜃気楼説を紹介せねばならないのかな」と、もどかしさを覚えながら同資料館を辞した。

13：00 同資料館から約2km東の「道の駅不知火」の駐車場で昼食を摂る。

13：30 八代市東陽町のR443号線沿いにある「菅原神社」へ向けて出発。

14：10 R266→R3→R443を經由して周囲が水田に囲まれた「菅原神社」へ到着。

同神社はシラヌイ伝承を持つ白髪(シラカミ)山と関係があり祭神は「白髪天神」である。肥後国史によると『白髪山より下りてこられた白髪天神様は、行く手を遮る堤防の様な岸壁を足で蹴破って通ったとの説があり、その穴が「白髪天然橋」で白髪天神様を祭ったのが菅原神社です。この菅原神社の裏の田んぼには、蹴破ったときの破片と伝わる直径2メートル位の岩が残っています』と立て看板の説明である。

神社の右側後方の水田の中にそれとおぼしき岩が認められ、神社は白髪天神の休息地に建てられたという。

東北にもシラカミの地名がある。

アイヌ語で解釈すると【シ(大きな・偉大な)ラまたはラン(降る・天下る)カミ(カムイ)】



菅原神社（八代市東陽町北畑中）



水田に鎮座する伝承の岩



となり、『偉大(大いなる)なカムイの降臨』を意味している。

白髪天神とは、聖数6で表現されるアイヌ民族の始祖神オキクルミカムイ(オイナ カムイ)のことなのかもしれないと考えを巡らせて、次の目的地「河俣阿蘇神社」へと向かう。

14:40 R443を戻り「道の駅東陽」の三叉路を左折してR25へと入る。

15:10 上り勾配で両側を山に囲まれた岩奥川とほぼ平行に走りR25を20分程走行し、川の対岸の「河俣阿蘇神社」へ到着。

岩奥川に掛る橋を渡った右側に「河俣阿蘇神社」の拝殿がある。

神社に隣接して川俣保育園があるが、夏休み中か園児の声も聞こえず閑散としている。

同神社には「健緒組命の土蜘蛛征伐にゆかりのある神社」との立て看板があり、「健緒組命」を祭神としている。

肥前国風土記によると『十代崇神天皇の時代、朝来名の峰に土蜘蛛打猴・頸猴がいて、部下百八十余人を率いて天皇に従わなかった。

そこで朝廷は勅令により肥君の祖・健緒組を派遣して征伐させた。この後、健緒組は国内を巡察し、八代郡の白髪山に着いて宿泊した。その夜大空に火があり、自然に燃えていて、段々と降りてきて、この山に近づいて燃えたときに、健緒組は見て驚いて不思議に思い天皇に報告した』という。



川俣阿蘇神社 (八代市東陽町川俣)



石灯籠の笠の四隅に刻まれたワラビテ文様

地元の伝承によると「火の国」の由来ともなった「シラヌイ」はここ川俣地区に天下ったといわれている。

健緒組の描写からは大きな人工的火球が想定され、アイヌ語でシラヌイは「天下る火炎」と解釈されることから、この火が「シラヌイ」或いはオキクルミカムイの搭乗機である「シンタ=UF0」であった可能性も考えられた。境内を隈なく巡り石灯籠の笠の先端四方に刻まれたワラビテ紋様を発見した。

ワラビテ文様は、古くは縄文・続縄文の土器、九州の装飾古墳、長野県の古い瓦、そしてアイヌの民族衣装などに認められる。

朝来山の土蜘蛛、白髪山のシラヌイ或いはUF0



## 肥前国風土記(現代語訳)

### 土蜘蛛 (ウチサル・クビサル) の伝説 (火の国の由来)

肥前の国は、もとは肥後の国と合せて一つの国であった。昔、磯城瑞籬宮御宇御間城天皇(崇神天皇)の御世、肥後国益城郡の朝来名の峰に打猿(ウチサル)と頸猿(クビサル)という二人の土蜘蛛がおり、これらは180人余りの軍勢を率いて天皇に服従しなかった。

そこで、天皇は肥君らの祖である健緒組(タケヲクミ)に征伐するよう勅命を下すと、健緒組はそれを承って土蜘蛛らを悉く滅ぼした。それから健緒組は国を巡って観察したが、日が暮れたので八代郡の白髪山で宿をとった。

その夜、虚空に火が現れて自然に燃え上がり、それがだんだんと下ってきて山に火が付いたので、それを見て驚いた健緒組は不思議に思って復命した際に「勅命を受けて西夷を攻めましたところ、刀刃を濡らさずして首長どもは自ずと滅びました。ですが、後に威霊のようなものが現れ、それは火が下りてくるようでした。これは何でしょうか」と申し上げた。

すると、天皇は「そのような事は聞いたことがない。火が下った国は火の国というべきだろう」と言った。これにより、健緒組は火の君 健緒組(タケヲクミ)の姓名を賜り、この国を治めさせた。

また、これによって この国は火の国と呼ばれるよう

になった。

この後、この国は肥前と肥後に分けられることになった。

また、纏向日代宮御宇大足彦天皇(景行天皇)が球磨贈於(クマソ)を誅して筑紫国を巡狩した際、葦原の北方から船に乗って火の国に行幸した。

しかし、海上で日没になり、暗くて何処に居るかも分からなくなった。そんな時、忽然と光り輝く火が現れ、それを遙か遠くに目撃した。そこで天皇は「真っ直ぐに火の方に向かえ」と命じると、やがて岸壁に辿り着くことができた。

そこで天皇は「火の起こった場所はどこだ?これは何と呼ばれるのだ?この火はどのように起こされたのだ?」などと問うと、土地の人は「これは火の国八代郡の火の邑で起こりましたが、この火の主は知りません」と答えた。これを聞いた天皇と群臣たちは「この火は人の起こしたものでは無いが、これが火の国と呼ばれる由縁であることは分かった」と言ったという。

※肥後国風土記では崇神天皇になっているが、古事記では神武天皇となっている。

※ウチサル・クビサルの猿には、「腕力が強い・賢い・身軽」などの意味がある。

現象、白髪天神(オキクルミカムイ)の降臨伝承など色濃く残るこの地域では、ヤマトに滅ぼされはしても人間として生きたその証を石灯籠に刻み後世に伝えているのである。

残念ながら白髪山は山と山が重なり合う関係上、谷間からの撮影は困難であり撮影を断念した。

15:50 次の目的地「山の神神社」を目指す。

16:00 「山の神神社」は「川俣阿蘇神社」からR52を10分程進んだ地点である。

道路の上がり勾配がきついヘアピンカーブの中間地点から右側の崖を数メートル下りるとお堂が建っている。

北海道伊達市北湯沢の英雄神ポイヤンペ(オキクルミカムイの別称)と関係が深い「山の神」神社を想定していたが、調査した結果、残念

ながらこの神社は道路建設時の安全祈願のために建てられたものと判明した。

16:15 R52→R443→R3経由で今夜の宿泊先であるホテルウィングインターナショナル熊本八代へ向かう。



山の神神社 (八代市東陽町川俣)



17:05 八代市の宿泊先へ到着

8/28

9:00 ホテルウイングインターナショナル  
熊本八代を出発。

八代ICで九州自動車道へと上がり約130km離れた  
鹿児島県霧島市の「上野原縄文の森展示館」  
を目指す。

ほぼ山間部の通行である。

鹿児島に入ると前方に山頂を雲で覆われた桜  
島の裾野が見えてきた。

11:10 国分ICで下りて「上野原縄文の森展  
示館」に到着する。

同展示館は縄文早期から中世に至る複合の上  
野原遺跡から出土した土器や石器を中心に、  
鹿児島の埋蔵文化財に関する多数の資料が展  
示され、オシャレで高級感漂う複数の展示室  
で構成されている。

上野原遺跡では縄文時代早期後葉の土器や石  
器などの遺物15万点以上が発掘されていて、  
同時期の他の遺跡と比較すると多種多様であ  
るといふ。





## ◎ 上野原遺跡 ◎

南に鹿児島湾や桜島、北に霧島連山を望む、鹿児島県霧島市東部の標高約250mの台地上にあります。約9,500年前には定住したムラがつくられ、また約7,500年前には儀式を行う場として、森の恵みを受け、縄文時代の早い段階から多彩な文化が開花し、個性豊かな縄文文化がきずかれました。約3,500年前にはおとし穴をつくり、狩り場となり、約2,500年前～約2,000年前、約1,600年前～800年前にかけては、再び台地上に人々が住みムラをきずいた複合遺跡です。

北海道にも多く展示されている渦巻紋やワラビテ紋の土器が目を引く。

また、台付皿形土器(高屋氏糠塚古墳・縄文時代前期約6,000年前)と対面し、「飛騨高山まちの博物館」に展示の列孔浅鉢土器を想起せずにはおれなかった。

12:10 上野原縄文の森展示館」を退館。

国道504号を經由して「霧島市立隼人塚史跡館」へと向かう。

12:50 約40分で同館へ到着。

霧島市の繁華街の地区からほどない距離に霧島市立隼人塚史跡館がある。

同館は国指定史跡「隼人塚」の歴史や由来を

紹介するガイダンス施設である。

日曜日であったが来館者は我々以外いなかった。

隼人塚はヤマト朝廷に平定された隼人族の靈魂を供養して、災厄を免れるために建てられた供養塔と伝えられているが、現在では平安時代の仏教遺跡と考えられている。

しかし、ヤマト側の侵略戦争において、かつて「土蜘蛛」とも蔑視されていた隼人が果敢に抵抗し、多くの命を失ったことは紛れもない事実である。

隼人族には天皇に帰順しない者たちがいた一方、帰順して天皇を守護する任務を担った者たちもいる。

「隼人の盾」は隼人を象徴する文様であり、アイヌ文様との共通したデザイン性が認められ、たとえ両者に数千kmの隔たりがあろうと同じ意志、同じ目的を持続けていたことの証左に他ならないのである。



霧島市立隼人塚史跡館 (霧島市隼人町)



館内を取材するスタッフ



図3

「隼人の盾」 隼人塚史跡館所蔵(複製品)





図4 国指定史跡隼人塚

だが、解説には、この「隼人の盾」としての紋様は魔除けの意味をもつとされ、天皇の守護において「隼人の盾」を呪術的な物として使用していたという。

アイヌの矢筒の文様がそうであったように、この「隼人の盾」という文様は、ヤマトには理解しがたい「特殊な力と意味」が込められており、反ヤマトの懐柔には必要不可欠な存在であったのであろう。

多くの同族を殺戮したヤマトの手先となって奉仕する隼人は「お見方アイヌ」以下の存在であり、「隼人の盾」を悪用して次から次へと原住民を懐柔していったに相違なく許し難き蛮行である。

館内には「隼人の盾」の他、隼人に関係した資料や遺物が展示されていた。

13：25 正面玄関右側の隼人塚を撮影して同館を辞した。

昼食の後、国分ICより九州自動車道経由で取材予定にはなかった「熊本博物館」を目指して約170kmの道程を北上する。

益城熊本空港ICを下り、一般道で市中心部の熊本城公園に併設された同博物館へ向かう。

16：35 かなりタイトな時間であったが、閉館寸前の博物館へ到着した。

同館では旧石器時代から現代までの遺物約4100点を常設している。



市立熊本博物館(熊本中央区古京町)



図5 縄文土器(中津式土器)他  
(市立熊本博物館収蔵)

ここでもアイヌ文様と類似した縄文土器などが展示されていた。

高級感漂う建物ではあったが古代の展示品は少ない印象を受けた。

また、撮影はできなかったが同館に収蔵されている非展示のイナウは天草地方の物であると後日判明した。

追い立てられるように駆け足で館内を巡り本日の取材を終了する。

17：00 同館より数キロ圏内の本日の宿泊地レフ熊本byベッセルホテルズへと向かう。



### チプサン古墳



日本の装飾古墳を代表し、且つ最高峰に位置付けられるチプサン古墳。  
地球紙史に燦然と輝く他に類のない宇宙とのコンタクトの状況を鮮明に描写している。頭上に冠を頂くキングが慶賀に訪れた7機の太陽円盤(シンタ)を歓迎して迎えてい

る。  
チプサンとは、アイヌ語でずばり「太陽或いは船の降下」を意味しており、発音が類似しているという低次元の発想から名付けられたものではなく、石室の装飾が全てを物語っているのである。  
※表紙参照

### 岩戸山古墳



正義の政治の遂行者であり石人・石馬(石製表飾物)の文化を九州内外に形成せしめた筑紫の君磐井が生前に築造したといわれている岩戸山古墳(福岡県八女市)。  
古墳の別区に設けられた街頭には、解剖、盗人、贓物などと考えられ

る石製表飾物が配置され、裁判の状況を想起させる古代律令制の存在を暗示している。二重の太陽マークを上半身に刻む大分県日田市の稲荷神社の境内に安置された石人は、岩戸山古墳から移設されたものであるという。



8/29

9:00 ホテルを出発、約30kmの道のり山鹿市のチプサン古墳を目指す。

九州自動車道の熊本ICを上がり、北上して菊水ICで下りて一般道(R16→R315→R443)経由で山鹿市街へと入る。

フラワー・ショップにて献花の花束をスタッフが作成する。

11:00 チプサン古墳着。

晴天の中、メンバー全員が古墳の前に整列、布川誠一が代表して献花を行う。

その後、約60年前に「太陽円盤の旗印を遠く海外にたなびかせんことを誓う」との松村総主幹による『チプサンセレマニー・メッセージ(チプサンの誓い)』を朗読した。

続いて、Aerospaceのメンバーが『チプサンの誓い』を継承し、“ニューエイジワーカーの一員としてその使命を全うすることを誓う”との力強い宣誓が、参列メンバー全員により行われた。

11:30 チプサン古墳を後にして2km程離れた鍋田横穴群へと向かう。

11:35 菊池川水系の岩野川沿いにある鍋田横穴群へ到着。

岩野川の川岸に作られた“鍋田水遊び公園”横の崖面とR443沿いの崖面に計61基が確認されている。

7世紀頃に造られたとみられる人物や鞞(ユギ=矢筒)などが横穴の入り口付近に浮彫りされている。

何より圧巻はイランのベヒストンの磨岩に刻まれた「アフラマツダ像」を想起させる「有翼太陽円盤像」の彫刻であった。

一部剥離している箇所もあるが翼や着陸ギアである脚状の部分の装飾と神聖さを表す赤色が辛うじて確認できた。

この古墳の被葬者は生涯を通じて最大の出来事であった“太陽神とのコンタクト”の状況を己の紋章としてその入り口に刻んだに違いないと考えられた。



チプサン古墳の石室(レプリカ・山鹿市城字西福寺)



古代の住居、鍋田横穴群  
(山鹿市鍋田)



博物館や歴史史料館での雰囲気とは違い、まるで古代にタイムスリップしたかのような錯覚にとらわれた不思議な体験であった。

この彫刻が後世の人々への古代人の重要なメッセージであるということを強く感じて鍋田横穴群を後にした。

菊水ICから九州自動車道へ上がり一路福岡へ向けて北上。

13:00 福岡へ到着。

レンタカーを返却後、福岡空港へと向かう。

14:25 福岡空港(14:25発)→新千歳空港(16:45着) JAL3515便にて福岡空港を出発。

16:45 新千歳空港へ到着、現地にて解散する。

3日間の総距離およそ800km、タイトなスケジュール

ルではあったが何事もなく無事調査・取材行を終了できた。

昨年に続きシラヌイの出現を確認することはできなかった。

毎年シラヌイの定点観測を行っている宇城市教育委員会によると、ここ10年間シラヌイの出現は確認できていないという。

この事実は完全に地球が最終段階のさらにラストへと突き進んでいることを意味しているに相違ない。

真の人間文明を捨て去り、物質文明を選択した地球人類の飽くなき強欲と破壊の終着点は完全なる破滅であり、来世への逃避は許されるべくもない。

どのような世界になろうと、自己に課せられた任務の遂行、唯それだけなのである。



鍋田横穴入口の右上部に刻まれた有翼太陽円盤像(1997年撮影)



有翼太陽円盤のイラスト



27号の横穴側面に装飾された「人物、弓、鞆、盾ほか」